

令和 6 年 5 月 20 日現在

機関番号：10101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2023

課題番号：19K23323

研究課題名（和文）オンライン大学で学ぶ女性の学習環境と自己調整学習

研究課題名（英文）Learning Environments and Self-Regulated Learning of Women in Online University

研究代表者

石川 奈保子（ISHIKAWA, Naoko）

北海道大学・高等教育推進機構・准教授

研究者番号：40846896

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、オンライン大学で学ぶ女性社会人にインタビュー調査をした。(1)目標修学年数を決めた上で、仕事量を調整したり家事の効率化や育児のアウトソーシングをしたりすることで、学習時間を確保していた。(2)不安の解消や学習の効率化のために、SNSなどでほかの学生との情報交換をしていた。(3)学ぶ目的が明確な学生は、入学前からの仕事や活動をより精緻に行うことを理想としていた。(4)家族や職場の人が持つ女性の学び直しに対する価値観によって、支援の有無やかかけられる言葉が異なっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、成人が学び直しをすることの意味、女性の学び直しに対する人々の価値観に関する示唆を得たことである。また、社会的意義は、リカレントやリスキリングに注目が集まる昨今、女性社会人が大学で学ぶ際に直面する課題や学習の継続を妨げる要因に対する対処方法について明らかにした点である。

研究成果の概要（英文）：In this study, we interviewed female working adults studying at an online university.

(1) After determining the maximum number of years of study, they ensured time to study by adjusting their workloads, streamlining household chores, and outsourcing childcare. (2) By exchanging information with other students through social networking services and so on, they were able to relieve their anxiety and improve their learning efficiency. (3) Students who had a clear purpose for learning were ideally wanted to make their work and activities more elaborate. (4) The support and encouragement they received differed depending on the values that family members and people in the workplace held about women's re-learning.

研究分野：教育工学

キーワード：生涯学習 自己調整学習 オンライン大学 女性

1. 研究開始当初の背景

2000年代以降のオンライン環境の整備によって、ほとんど、あるいはすべての卒業単位をeラーニングで取得できる「オンライン大学」が日本においても次々に開校された。オンライン大学の学生の約9割は社会人であり、社会的役割を担いながら学習している。高度経済成長期に確立された「男は仕事、女は家庭」という性役割意識は根強く、女性は仕事に加え、家事・育児・介護を担うことが当然とされている。また、就学にも性差が残っている。日本における大学進学率は、依然として女子より男子のほうが高い(文部科学省 2020)。理工系や社会科学系は男子が、人文系や教育・家政系は女子が多いというように、それぞれの性別に「ふさわしい」とされる進路選択ルートが存在していることも指摘されている(苅谷ほか 2010)。

そのような状況の中、社会人が大学で学ぼうとしたとき、男性は家事や育児を免除され、仕事と学習に専念できる一方で、女性は家事・育児・介護、さらに仕事を完璧にこなした上で、学習をすることを余儀なくされているのではないだろうか。オンライン大学でいま実際に学んでいる女性たちは、学習時間の確保や学費などの見通しを立て、周りの人たちの理解や協力をある程度得た上で入学したはずである。しかし、実情はどうであろうか。また、eラーニングは「いつでもどこでも学べる」代わりに、学習の継続は学習者の自主性に委ねられる。そこで、自らの学習を動機づけ、維持し、効果的におこなう「自己調整学習」のスキルが必要である。

オンライン大学の女性社会人学生は、どのような学習環境でどのように自己調整しながら学習を進めているのかを明らかにすることは、オンライン大学での学びの成功だけでなく、女性の生涯学習を成功させ、女性の社会的地位を向上させる一助となりうると考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、オンライン大学の女性の学習環境や学習方法を明らかにし、学習を継続するための方策について検討する。具体的には以下の2点である。

- 1) オンライン大学の女性社会人学生はどのような学習環境において、どのように学習を進めているか。
- 2) オンライン大学の女性社会人学生は、どのような目的で大学に入学し、どのような卒業後の展望を持っているか。大学で学ぶことについて、家族や職場などの周りの人たちはどのように理解・協力しているか。

3. 研究の方法

(1) 研究と分析の方法

本研究では、インタビュー調査を実施した。データ分析は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下 2020)でおこなった。

(2) 協力者の属性と調査期間

首都圏にあるXオンライン大学に在籍する女性社会人学生を対象とした。協力者は16人(25~56歳)であった。入学年度は、2019年度4人、2018年度3人、2017年度6人、2016年度3人であった。調査期間は2019年11月から2020年3月、および2020年10月であった。

(3) 質問項目

質問項目として以下の6項目を用意した。現在の学習している目的は何か。学習時間の確保の仕方は何か。うまくいっているかどうかとその理由。大学で学ぶことに対する周りの人(家族、職場の人など)の理解はどうか。理想の学習環境はどのようなものか。学習をうまく進めるための方法は何か。学習することで目指す理想の自分はどのようなものか。

(4) 手続き

インタビュー調査は、対面、またはオンラインで実施した。協力者には面接に先駆けて、研究の目的、倫理的配慮、面接の進め方、ICレコーダーやZoomのレコーディング機能で面接内容を録画・録音することを説明し、研究参加同意書への署名を得た。事前に用意した質問のほかに、話の流れを見ながら収集すべきデータにつながる話題を適宜加えていった。

(5) 分析テーマと分析焦点者の設定

2つの分析テーマに分けて分析した。1つ目はXオンライン大学での学習環境と学習方法(研究の目的(1))、2つ目はXオンライン大学で学ぶ目的と卒業後の展望、周りの人からの理解と協力であった(研究の目的(2))。分析焦点者をXオンライン大学の女性社会人学生とした。

4. 研究成果

(1) 学習環境と学習方法

目標就学年数を、1年次入学者は4年間、編入学者は3年間などのように明確に定め、就業形態を変えて仕事量を調整することで学習時間を確保している人が多くみられた。特に家族がいる人は、家事の効率化や育児のアウトソーシングなども進めながら、学習の優先順位を意識的に上げて学習を進めていた。

eラーニングやXオンライン大学の慣習に馴染むまで、学習に苦慮していた。特に、学習管理システムに設置された電子掲示板での意見交換をうまくできる人とそうでない人とがみられた。また、キャンパスまで行く機会は年に数回程度であり、それを不満や残念に思う人もいた。

入学時からほかの学生と積極的に交流しようとした人、途中から人脈を広げた人、必要最低限の交流にとどめる人の3タイプがみられた。積極的に交流しようとしている人は、情報交換を目的として、誘われたイベントに参加することから始めて、徐々に個人的に連絡を取り合える親しい友人を作っていた。程度の差はあるものの、多くの人がLINEやFacebookなどのSNS(Social Networking Services)を利用して、同期や学内サークル、所属研究室の学生たちとつながっていた。その中で、学習内容について教員やメンターには質問しにくいことを相談しあったり、一緒に食事や勉強会をしたりと、さかんに学生同士の交流がされていた。協力者の多くが、ほかの学生、教員・メンターとの交流によって学習をより深め、交流を楽しいものとして感じていた。

(2) 学ぶ目的と卒業後の展望、周りの人からの理解と協力

入学時の学ぶ目的が明確であった人は、慎重に大学の情報を得て入学を決定していた。そして、大学での学びによって、入学前に比べて人間的に豊かになったことを自覚していた。また、卒業後の展望として、入学前からの仕事や活動に対して、より精緻に取り組んだり発展させたりすることを理想としていた。一方で、入学時の学ぶ目的が曖昧な人は、入学前にも何かを学んでおり、卒業後も何かを学ぶことを理想としていた。その場合、周りの人の理解を得にくく、本人も理解や協力を得ることを諦めている傾向がみられた。

女性社会人学生の学び直しがもたらす周りの人との関係は、周りの人の「女性の学び直し」に関する価値観がベースになっていた。女性が学び直すことに否定的な人からは見下すような言葉、無関心や非協力的な対応を受けており、それを気にしないように対応していた。一方、女性の学び直しに肯定的な人からは励ましの言葉や学習に専念するための支援を受けており、それに対して報いることができるよう学習にいつそう専念していた。また、周りの人の価値観がどうであれ、理解や協力を得るために、仕事と学びのつながりをアピールしたり、就学年数を限定して協力を要請したりといった働きかけをするという人もみられた。

(3) 本研究からの示唆

女性社会人学生が卒業まで学習を継続させるための方策として、以下の2点が挙げられる。

1つは自身の社会的役割の調整である。目標とする就学年数を明確に定め、その期間の仕事量を調節したり、家事・育児の負担を軽減したりすることが有効である。そのためには、家族や職場の人などの理解や協力を得られることが理想である。仕事や生活と大学での学びがどのようにつながっているのか、学びをどのように活かしたいかを説明することは、周りの人の理解や協力を得るきっかけになりうると思われる。

もう1つは大学での他者との交流である。連絡を取り合える友人を数人でも得ることは、学習内容の理解や学習の効率化、大学での手続きなどに関する情報の収集のために有効である。また、情報交換をすることで、学習上や生活上の不安解消、学習意欲の維持も期待できる。

本研究では、性役割意識、女性の学び直しに対する否定的な価値観を持つ人によって、女性社会人学生の学びが妨げられている状況があることが確認された。特に40代以上の女性社会人が「大学で」学び直すことには、18歳のときに「女性だから」と大学に行かせてもらえなかったという背景もあった。こういった状況を変化させていくことは、日本社会全体の大きな課題である。

引用文献

荻谷剛彦、濱名陽子、木村涼子、酒井朗(2010)教育の社会学[新版]- 常識の問い方、見直し方 - .有斐閣、東京

木下康二(2020)定本 M-GTA - 実践の理論化をめざす質的研究方法論 - .医学書院、東京

文部科学省(2020)学校基本調査 - 令和2年度結果の概要 - .

https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1419591_00003.htm (参照日 2021.11.02)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 石川奈保子 |
| 2. 発表標題 オンライン大学で学ぶ女性の学習環境 |
| 3. 学会等名 日本教育工学会2021年春季全国大会（第38回大会） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 石川奈保子 |
| 2. 発表標題 オンライン大学で学ぶ女性社会人学生の卒業後の展望と学びに対する周りの人の協力 |
| 3. 学会等名 日本教育工学会研究会 |
| 4. 発表年 2021年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|